

2013.7.20

東南アジア学会関西例会

アブラヤシ研究会

パーム油産業の構図：マクロ構造と生産企業

佐藤百合（アジア経済研究所）

【要旨】

インドネシアの輸出構造は、2000年代にすっかり資源依存に回帰してしまったが、その主役の一つがパーム原油（CPO）のインド・中国向け輸出であった。2011年8月、政府は国内での加工産業、とくに油脂化学（オレオケミカル）産業を振興する方向へと政策の舵を切った。すると、2012年には油脂化学生産が2割増加する変化が起きている。この変化は、低加工の資源輸出からより付加価値を高めた加工品輸出へという、産業政策の大きな変化のなかに位置づけることができる。

本報告では、2000年代に世界最大規模となったインドネシア・パーム油産業の構図を、マクロおよびミクロ的視点から、通時的変化やマレーシアとの共時的比較を視野に入れて捉えてみたい。

まず、2000年代のパーム油産業の拡大がインドネシアの経済構造にどのようなインパクトを与えたかをマクロ的に検討する。次に、いったい誰がこの産業に参入し投資し、生産の主役になっているのか、農園面積・パーム原油生産・油脂化学生産のそれぞれにおいて明らかにする。これらの結果を踏まえて最後に、インドネシア・パーム油産業がこれからどう展開していくのか、今後の方向性を展望する。